夢　塾　だ　よ　り

～　ピアノと私　～

（第 34 号）

令和 2 年 5 月 28 日

「♪　ミレ ミレ ミシ レドラ♪ ♪ ♪ 」　渡慶次小学校の音楽室に一台のアップライトのピアノがありました。右手の人差し指でベートーベンの『エリーゼのために』　の出だしの部分を単音で弾きました。それが私とピアノの最初の出会いです。同じ音を右足でペダルを踏み込んで弾くと、なんとも言えない幸福感に包まれたことを思い出します。小学６年生になり、音楽専科の安田澄先生は、私をピアノが弾ける生徒だと見込んで、中頭地区　合唱コンクールの伴奏者に選んでくれました。それから先生はご自宅にまで私を呼んでご指導してくださいました。たしか、『花のワルツ』『サザンカの道』だったと思います。なんとかコンクール当日までに弾くことはできましたが必死でした。

それから時は流れ、映画『月光の夏』の中で知覧から飛び立つ特攻隊員が弾くベートーベンの『月光』に心打たれました。その月光が弾けたらいいという一心でピアノ教室に通いました。32 歳の夏です。当時『高志館』という塾を経営していたので昼間は時間がありました。夢中になり練習しました。バイエル教則本から始めました。津波勇雄先生のピアノ教室にはその後 10 年は通い続けました。43 歳には先生の推薦で南城市のシュガーホールで開催された NHK の「ハネケン・ハカセのアットホームコンサート」に出演する栄光に恵まれました。井上陽水の少年時代をフルオーケストラをバックに弾きました。そのときの緊張を越える体験は未だにありません。映像が残っていますが顔が引きつっています。ジュディ・オングさんがゲスト出演で記念のツーショットが玄関の靴箱の上に飾ってあります。

今でも初見での楽譜は読めませんから、暗譜して弾くというスタイルを貫いています。今は、ショパンのノクターン１番をひたすら暗譜しようと取りかかっています。５分以上もある大曲ですが７月までには弾ける予定です。

「趣味を持つ」のはいいことで、昨今のコロナ禍にあってもステイホームは苦痛ではありません。ピアノの練習ができるのです。生まれ変わってなりたい職業はと聞かれたら、小澤征爾のような指揮者かアシュケナージのようなピアニストです。